

平成 28 年 12 月 22 日現在

機関番号：14201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26580035

研究課題名（和文）近代書道史の再構築-美術の制度化を視野に入れて-

研究課題名（英文）Reconstruction of modern shodo history with bringing institutionalization of art into view

研究代表者

中村 史朗（Nakamura, Shiro）

滋賀大学・教育学部・教授

研究者番号：90378430

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治・大正期の美術界全体との関連で近代書道史を再構成しようという試みである。現在、書は美術界の一領域を担っているかのようであり、制作側の姿勢は実に多様で、混沌の様相を呈している。これは明治・大正期における美術界と書道界のせめぎ合いに由来する面が強いと考えられる。展覧会や教育の領域において制度としての「美術」が書を除外しながら構築されるなかで、書の世界でのさまざまな営みが、「美術」への距離感を変えながら複線で推移するさまを考察した。とりわけ「六朝書道(りくちょうしょどう)」を標榜する複数の勢力による運動に着目し、美術制度に対峙する書のありようを記述した。

研究成果の概要（英文）：This research tries to reconstruct the modern history of shodo in relation to the whole art world of Meiji/Taisho era. Today shodo is viewed as one area of art but actually producers' attitudes vary among individuals and are in a state of chaos. This situation may issue from conflict between art world and shodo world in Meiji/Taisho era. I observe dual-track transitions of various acts in shodo world with their changing distance between 'art', in the situation that institutions of art had been constructed as they excluded shodo. This research describes how shodo confront art-constitutions with particularly focusing on movements by multiple power that advocate 'Rikucho-Shodo'.

研究分野：書道史

キーワード：六朝書道 書と美術制度 龍眠会 中村不折 河東碧梧桐 日下部鳴鶴

1. 研究開始当初の背景

これまでの近代日本書道史研究とその問題点

これまでの近代日本書道史研究は、新政府の樹立にともなう社会諸制度の激変を視野に入れることが少なく、記述の対象を書の世界のみに限って進められてきたと言うことができる。幕末の書と明治・大正の書との連続性のある程度認めながら、中国からの新知識がもたらされることによって特に漢詩文の書は、その表現が刷新された、といったことが繰り返し説かれてきた。

その概要を簡述すると以下ようになる。明治 13 年に楊守敬が来日し、金石碑版の新資料を大量に将来し、その書法表現に日下部鳴鶴ら日本人書家は大いに刺激を受けた。彼らは新たに「六朝書道」を提唱し、明治の新書風を築くことを志向する。鳴鶴は多くの後継者を養成し、その門流は現代の書にまで影響をおよぼしている。また、鳴鶴らの動きに刺激を受けた日本人書家が、何人も清朝の書の成果を直接に学ぶことをめざして中国に渡り名家に師事することがあった。この動向を代表するのが、中林梧竹、北方心泉、前田黙鳳らである。明治・大正の書は、こうした相次ぐ新表現の提起によって活性化し、単に中国の書を祖述するだけでなく、日本人独特の書のあり方が検討されるようになった。

これまでの研究においては、およそこの骨格を前提として、各論において細部を詳述することが重ねられているというのが実状である。他の要素にも言及はなされるのだが、それは上述のながれに付随して説明されることが多く、総体の見直しにつながるようなものは見当たらない。したがって関連の研究は、一面的な人物論や作品論などで内容の似通ったものが多く、状況を総体でとらえ人物や事象を関係性でとらえ直そうとすることが求められているだろう。前代までの中国、日本の書道史が政治・経済の状況、あるいは文化総体から名家や作品をとらえる研究姿勢が一般化していることと比較しても、いち早く対応が求められる事態であろう。

今後の近代日本書道史の研究の方向性を考えるとき、社会の大きな変動にともない、諸制度の中で書がどのように位置づけられるようになったのか、あるいは絵画、彫刻、工芸や文学、音楽など他の芸術諸領域が大眾に享受されるようになる中で、書はどのように立ち位置を推移させていくのか、ということがまずは検討されなくてはならない。個別の事例についても、関係性の面からとらえ直して内容の研究を進めなければ、微調整しながら循環するような現状から抜け出すことはできない。視点を移して今日の書の実状を見たとき、その混沌のさまはある種異様にすら映る。歴史的な古典の再現を旨とし伝統主義を堅持しようとするものから、ひたすらアートとしての認知を欲して試行錯誤を繰り返すものまで、現状は複雑かつ流動的で、全体像を把握して論評することは難しくなっている。この混迷ぶりは現代の問題としてとらえられがちだが、歴史的要因を内包していることにも注意が必要である。近代書道のながれの中で生じた諸事象を屈折したかたちで継承しているのが現代の書であるとも言えるのである。制作側にその自覚が乏しいことも、とりとめなさの固定を生んでいる大きな要因である。現代書への道筋を記述することも、これまでの書道史では等閑視されてきた。本研究では、近代日本書道史研究の現状を検討してこのような問題意識を持つにいたった。時間をかけて枠組みをつくり直すということでは今後の研究に成果は期待できないと考えるものである。

返すものまで、現状は複雑かつ流動的で、全体像を把握して論評することは難しくなっている。この混迷ぶりは現代の問題としてとらえられがちだが、歴史的要因を内包していることにも注意が必要である。近代書道のながれの中で生じた諸事象を屈折したかたちで継承しているのが現代の書であるとも言えるのである。制作側にその自覚が乏しいことも、とりとめなさの固定を生んでいる大きな要因である。現代書への道筋を記述することも、これまでの書道史では等閑視されてきた。本研究では、近代日本書道史研究の現状を検討してこのような問題意識を持つにいたった。時間をかけて枠組みをつくり直すということでは今後の研究に成果は期待できないと考えるものである。

2. 研究の目的

これまでの研究の欠を補うことが本研究の主たる目的となる。すなわち明治・大正期の美術界と書の世界の関係を明らかにしながら、同時期の書道史を再構成しようとすることが主眼となる。明治期に制度としての美術が構築されていく中で、書は次第に公的な枠組みから除外されていく。内国勸業博覧会などの展示会にも回を追って出品機会がなくなり、文展にも出品区分が設けられず、東京美術学校にも書を学ぶ専科は設置されなかった。こうした事実はこれまでもしばしば指摘されており、結果として書は立場を失ってしまったかのような印象を与えている。これは美術制度の内側からの視点のみで現象が説明されてきたからである。反対側にある書の世界に視点を移すと、依然としてさまざまな勢力が拮抗し合う実態が存在していることが確認できる。これらの内実を、美術界との距離感を測りながら確認していくことで、従来の研究では明らかにされなかった書の実態が見えてくることになる。この事を根本に置きながら個別の課題の目標を設定した。

王羲之書法の考察 すべての前提として一

まず、近代日本書道を研究するに当たって、中国との関係を精査することは重要であるが、そもそも幕末期にいたるまで中国書法がどのように受けとめられ変容を遂げてきたかを探ることが先決である。とりわけ、日本に「書法」の自覚が生じたときに、それは「王羲之の書法」に近い意味合いを持つこととなる。それほどに王羲之書法と日本の書は関係が深い。ただ、仮名の生成が王羲之書法を起点とするように、王羲之を日本のすがたにいかにか定着させるのか、ということが日本の書の歴史であったとも言えるだろう。江戸時代には、いわゆる唐様の書が儒者によって重視されるなど、純然たる中国書法が顕彰される一方で、書の家々に代々受け継がれてきた書流の書や、禅僧による卒意性を特色とする墨蹟

の書、良寛や池大雅らによるいわば逸格の書など、さまざまな表現が複線で展開される。いずれも何らかのかたちで王羲之の書法を踏まえていることに注意が必要で、中国における王羲之の書法の展開を参照しながら、幕末段階での王羲之理解の実態を検証することが、次代の書のありようを知る上で重要なことである。王羲之の書法の考察は、本研究の大きな前提となっている。

空海の書の考察 「晋唐の書」の受容をめぐって

王羲之以降、その影響を受けない書人はないと言ってもよいが、本研究で考察の対象として着目したのは弘法大師・空海である。それは、明治・大正期の書が「晋唐の書」というものに特別な意味を見いだしているからである。金科玉条のごとくそれを信奉するものから、晋唐を否定しその脱却をめざすものまで立場はさまざまだが、当時の実状において「晋唐の書」の存在の大きさを認めている点では変わらないと言える。「晋唐の書」はもちろん中国の書なのだが、日本においてその代弁者のように性格づけられてきたのが空海である。空海は、唐代後半期に長安に入り、都における書の全体像を鯨飲するかのようによろしくとめて帰国した。今日では失われた唐代の書が、空海の書跡を通じて理解できる面があり、空海は中国書道史の欠を補う存在でもあるといえる。日本の書における圧倒的な影響力は、人物への敬仰の念とともにその書の史的な重要性があるからである。近代書道が「晋唐の書」を“従来の正統”と意識する中で、その中国書の一形態として空海の書の内実を検証することをめざした。

楊守敬来日と日本人書家のやりとりを再検証する

研究の中心は当然明治・大正期における書の展開を検討することで、まずは従来の研究の中心に置かれる楊守敬の来日と日下部鳴鶴ら日本人書家との交流について、先行の研究が説いてきた内容を再検討することをめざした。楊守敬がもたらした金石資料、法帖資料は、当時の日本人にとってはまさに宝の山で、拓本なども良質のものが多く、明治期の書を刺激するには十分なものであった。鳴鶴らは、楊守敬との筆談を通じて資料の内容を精査するとともに、それを素材として扱う際の書法を詳しく問うた。このことが後に鳴鶴らが主唱する「六朝書道」の興りとも言えるのだが、従来の研究では、新資料に接した鳴鶴らの驚きや、以後の「六朝書道」振興の意欲などが説かれるばかりで、事態を表面的にしか扱えていなかった難があるだろう。楊守敬が鳴鶴らに説いたこの書法の内容こそが重要で、以後の日本の書に大きな影響を与えるものの、それは清朝で碑学を扱う書人が生み出した新書法とは異質なものであった。これまで全くと言ってよいほど検討されな

かった、新資料と伝授された書法とのある種の“ねじれ”に着目して、喧伝された時代の書の正確を入念に読み解くことを課題としている。

鳴鶴らの運動と美術制度の構築

鳴鶴らは、楊守敬との会談を重ねるなかで新たな活動の方向性を見だし、新時代に見合った運動としての書を掲げ普及をめざす。全国規模での取り組みの詳細を明らかにする研究はこれまでに少なからず見られたが、同時代的に何が起こっていたかを確認する作業が欠落していた。楊守敬が来日したのは明治13年で、小山正太郎と岡倉覚三による「書は美術ならず」論争が展開されたのが15年のことである。鳴鶴らの「六朝書運動」は美術制度の構築が始まり、位置づけの難しい書の扱いが焦点化し始めた時でもあったのである。この双方の動きを同時的に対比して見えてくるものがあり、これを明らかにすることが本研究では継続的なテーマになっている。

新勢力の台頭 龍眠会を中心に

鳴鶴らが運動を展開する中で、自己完結的ではあるが、明治の書の骨格が出来上がっていく。その一方で美術制度は書を除外しながら足早にその構築を進める。書の側の人間はそのことを知らなかったわけではないが、どちらかといえば書の内部のことにのみ関心が強く、美術制度のことには無頓着であったように思われる(現在でもその傾向は変わらない)。しかしながら、明治も後半期になると書にも内部から新しい気づきが生まれる。鳴鶴らの方向に異を唱え、書の新たな方向を訴えるものが現れるようになるのである。最も顕著にその姿勢を打ち出したのは中村不折が主導する龍眠会であろう。鳴鶴らと同じく「六朝書道」を掲げるが、根本の問題意識が全く別のもので、作品に表出される表現手法は自ずと大きく異なるものとなった。不折らは、「美術」という新概念に書がいかに処すべきかという視点があり、ある意味で進歩的であった。一見奇矯にも映る作品群は書の内部においては厳しい批判にさらされるが、一方で社会的に反響を呼び一般に広く迎えられる現象が起きる。このような勢力の台頭によって、鳴鶴ら旧来の勢力は、自身の立ち位置を相対化せざるを得なくなる。明治後半期から大正期にかけて性格の異なる勢力が複雑にやりとりするさまを描きだそうと努めた。

龍眠会の活動実態

本研究では、明治後半から大正にかけて従来の書の枠組みをこえて活動した龍眠会にとりわけ注目している。それは主導的役割を果たした中村不折と河東碧梧桐が、それぞれに洋画と文学の世界において一線で活躍している人物であることもあり、書に対して従

来とは全く異なる観点を有し、そのありようの見直しに取り組んだからである。その活動実態を念入りに調べていくと、それまでにない着想を豊富に内包していることに気づく。これらの内実の検討、旧来の勢力とのせめぎ合いの実態を精査することを目指した。また、その活動は今日的にみても先進性を有するものであるが、龍眠会を起点にしてその後の書の発展がなかったのはどうしてなのか。この興味深い問題の解明にもあわせて取り組んだ。

3. 研究の方法

王羲之書法の実相とその継承の歴史を、主に作品の解析を通じて行った。

王羲之は中国・東晋期の門閥貴族の出身で、約束された官途を歩むも政治的な挫折を経験して、晩年は悠々自適の文人生活を送る。同時代から能書としての評価はあったが、どちらかといえば“能書の一人”ととらえるのが妥当で、際だった能書としての位置づけは後世の評価が蓄積した結果生まれたものであると考えられる。等身大の王羲之が見えなくなり、書の巨人が出現する流れを追っていくと、そこには時代毎の文化的思潮が反映されていることがわかる。東晋以降の南朝の歴代王朝、初唐の太宗の治世、北宋の太宗の治世などが、王朝を挙げてその王羲之書法の顕彰につとめた結果、名品と称されるものも、王羲之の原像を離れてあらゆる性格のものをその中に含むようになった。

こうした実状をふまえ、本研究では、まず王羲之の墨跡本と刻帖の代表的なものについて、それぞれがどのような性格の複製であるのかを検討した。あわせて後世の臨学の成果を取り上げて、王羲之の“習われかた”の視点から検討を加えている。とりわけ北宋の『淳化閣帖』成立以降の学書の流れが、以降の書の性格を定めるようなところがあると考え、元、明、清および日本の臨書作品を資料として取り上げ、それぞれの書法を分析した。集帖が多量に刻されるようになってからは、刻法のありようが千差万別で、その分王羲之書法がより見えづらくなり、想像をはたらかせながら習うということが常態化して、能書による新表現の創出がうながされることにつながった。よく見えないものを多量の質の異なる資料で追求するという書道史特有の創作の様態は、王羲之という軸を設けて行われるのだが、この姿勢は中国・清朝において、碑学が勃興して金石資料を基盤とした新書法が検討されたときも、同様の思考がはたらいたものと研究代表者は考えている。無機的とも言える金石資料から何を読み取って新書法に結びつけるのか、という着想は、『淳化閣帖』から明清の新書法が生み出された時と同様のものであると言わなければならない。

空海および伝空海の書跡資料の書法を分析するとともに、その書と思想の継承につい

て検討を試みた。

明治・大正期の新興の書を検討するときに空海の書は直接に関係するものではない。ただ、日本が自律的に中国の書を受け容れることとなった天平期あたりのことを考えると、資料の中核にはやはり王羲之書法があり、それは隋唐期のバイアスのかかったもので、すでに“書聖”像が確立した後のものであった。この性格の王羲之が以後の日本の書の骨格となり、後にさまざまな日本的な展開が見られるようになる。仮名の生成もその中に含まれるだろう。中国との交流がさかんになる中で、弘法大師・空海が唐にわたり長安で密教の修行にはげむと同時に、当時の書法に精通して帰朝したことは周知である。空海が唐代後半期における書法事情を総体で把握して日本に伝えたことと、従来から日本で継承されてきた王羲之を中心とする中国書法が合流して、日本人が対象化した「晋唐書道」の骨格が定まったと言ってよいだろう。空海の書は、真跡で「晋唐書道」を代弁している面があるのである。

「晋唐書道」は、日本書道史の流れの中で、中国より小さなスケールで時代の想像力を受けとめながら新書法を生み出してゆく。中国のような壮大な表現を生み出しにくくなったのは、時代が降るにしたがってそれは外国の書として意識されるようになったからであろう。そうした流れのなかで、伝承される空海の書跡は常に、歴史を振り返る対象として重視された。

本研究では、伝来する空海の書跡の諸相を確認し、それが唐朝の書のどのような実態を吸収するものであるのかを確認した。

筆談資料の内容の再検証をすすめ、楊守敬が日本人書家に伝えた書法の性格を検討した。

楊守敬の来日は、明治期の書にとって一大事であったことには違いない。ただ、このことをこれまでの研究では、沈滞していた幕末の書に、清朝の書の精華をもたらし、と図式的に解説されることが多かった。確かに楊守敬が携帯し日本で披露した金石碑版の拓本類は、清朝碑学の名家が着目したものが多く含まれており、書法の新資料を大量に目にして日本人は瞠目するほかなかった。ところが、楊守敬が伝えた書法は、その師である潘存の書法であって、それは清朝碑学の名家が提唱した書法とはむしろ異質のものであった。

日本の「六朝書道」創始期におけるこうした認識のずれが、後の新書道運動の性格を決定づけることになる。すなわち楊守敬が伝えた潘存の書法論が、明治期に共有されていた「晋唐書道」観と大変親和性が高いもので、清朝碑学の用筆論より王羲之書法を奉じる帖学の筆法論であった。本研究では、『八稜研斎隨録』などの筆談資料の内容検討を中心にして、これまでよく参照されてきた『鳴鶴先生叢和』や『鳴鶴先生学書談』のような著

述の内容も、書法論の見直しの観点から再検討を試みた。

美術制度構築の流れの中で書がどのように扱われるかを考察し、「六朝書道」の発展との対照を試みた。

明治政府は、諸制度を整備する中で、美術概念の定着を図るとともに、旧来の詩書画一致の文芸観の見直しを進めた。美術鑑賞もその行為自体の価値を重視しながらも、何を美術の範疇に収めれば国際上の交易がさかんになり、“勸業”に資することになるのか、ということが政府側の重要な視点であった。そうした時代風潮の中、書が公的な仕組みの中から除外されていくのはむしろ自然なことであったと言えるかもしれない。

内国勸業博覧会における「美術分類」が回を重ねるにつれて書をどのように扱うようになるのかなど、関連資料を駆使しながら制度の整備とともに書が居場所を失っていく過程を確認した。この点については、いくつかの先行の研究が指摘しているが、それらは制度の外にあって書がどのような活動を展開していたかに言及してこなかった。

鳴鶴らが「六朝書道」の運動を本格化させるのは、「書ハ美術ナラズ」論争が興り、美術としての書の扱いが世上で焦点化した時期と軌を一にしている。鳴鶴らの発言の中に、「美術」「芸術」といった翻訳語は見当たらず、東京美術学校が開校し、文展が発足しても、書の側の制度的な構えを主張することもない。雑誌を主にジャーナリズムにおける発信を保持しながら、超党派的な性格の「談書会」を結成し、「健筆会」など自前の展覧会を開催して、別の組織的活動の道をたどるのである。鳴鶴らが旧来の唐様の刷新につとめ、全国行脚や石碑の建立、雑誌記事による発信などを通じて、美術と相対する書の領域が社会的に確立できると考えていたのではない。その間の経緯を主に雑誌資料を精査することによって解明に努めた。

明治後半期から大正期にかけて、鳴鶴ら旧来の勢力と、新興勢力のせめぎ合いのありようを、資料調査を通じて検討した。

明治の後半になると鳴鶴らの門流が拡大し、晩年の鳴鶴は書の世界の領袖的な存在になる。大掛かりな師弟制度のモデルを築き上げたのは、公的に整備される美術制度に意識的に対峙する意図があったとも思われる。関係雑誌に発表される鳴鶴の書法論を整理し、作風の変遷を分析しながら、鳴鶴らの「六朝書道」がどのような到達を目指したかを探った。また、当時、京都においては内藤湖南、長尾雨山、羅振玉といった重厚な学識を背景とするグループが台頭しており、鳴鶴らが湖南らとの連携をも重視し学術的な面からも自身の書派の補強を図ったことも確認した。

一方で、時代の文化的潮流を読み取るかたちで、鳴鶴らとは全く質の異なった書を主張する勢力が現れる。中村不折、河東碧梧桐が主導した「龍眠会」がその代表格である。彼

らは美術制度の構築も視野に収めており、書における美術・非美術の議論にも関心が高かった。機関誌である「龍眠」が入手しづらくともあり、その活動の実態が明らかにされてこなかったが、本研究では収蔵機関から「龍眠」全冊を借用し閲覧することができたので、その結成の根拠、権威としての「晋唐書道」の見直し、書と美術との距離感、あらたな日本の書としての「六朝書道」などの観点をまず整理した。

主に機関誌「龍眠」の内容を検討することでその多様な活動の実態を明らかにしようとした。

「龍眠」の記事内容は豊富で、発展する書の雑誌文化の中にあっても、その内容は異彩を放つものであった。中村不折「漢魏書道論」、河東碧梧桐「六朝と吾輩」、後藤朝太郎「説文講話」のように龍眠会の方針の中核を知る記事、不折「例会席上録」、碧梧桐「同人閑是非」といった制作活動の内的な批評記事、「書壇風雲録」といったコラムの類までを読み解いていくと、美術制度への立ち位置、あらたな「六朝書道」の構想、これまでにない組織の形態、書の社会性という意識など、今日の書にも通じる注目すべき要素をいくつも見出すことができる。これら個別のテーマを順次解明するように努めた。

また、龍眠会を牽引する不折と碧梧桐が立場上完全な一枚岩という訳ではなかった。不折は歴史主義ともいえるべき姿勢を堅持し、碧梧桐は時代と対峙する思想を背景に、表現至上主義の言論・制作活動を展開した。双方の考えの差は龍眠会が活動を進めるにつれ顕著になり、「龍眠」にもしばしば“見解の相違”が示される。龍眠会的な着想が今日のものとしてしばしば示されるのは、龍眠会の活動実態がうまく継承されてきていないからだとも言えるだろう。

あわせて特記されることとして中村不折の大規模なコレクションの形成がある。このコレクションは学書資料としての価値を重視している点に特色がある。不折はコレクションの体系性や系統性をどのように考えていたかを考察した。

4. 研究の成果

王羲之書法の実相とその継承の歴史をたどり、変容の実態を確かめた。

王羲之書法の継承の過程を検討すると、その実態を離れて、着想の“型”を維持しながらあらゆる表現が時代ごとに生み出されてきた。明治の「六朝書道」の内実を考察する際も、無関係のようでありながら、こうした“型”を踏まえながら当時の日本にあって独特の表現を引き出そうとしていたことが確認された。この王羲之書法継承の実態に学ばないといけなことが多い。本研究においても、歴代の臨書資料から見えてくるものを、あらためて研究の材料とし、着想の系譜を記述し本題の考察に役立てた。

空海の書の書法の特徴を明らかにし、その書と思想の継承のあり方を確認した。そのことで明治期における「晋唐書道」の性格を知ることができた。

空海の書は、現在の中国ではうかがい知ることができなくなった隋唐の書の全体像を伝えている面がある。日本の平安初期における「晋唐書道」の自覚が、どのような範囲を有していたかを空海書の内容検討を通じて措定することができた。そして、明治・大正期には、鳴鶴らが「晋唐書道」と関係させるかたちで「六朝書道」を主張したが、その場で考えられていた「晋唐書道」は、元来のものから見てどのような質的変容を遂げていたのか、当時「書聖」と位置づけられていた空海を尺度としながら明らかにした。

楊守敬関係の筆談資料の内容の再検証によって、当時、日本人書家が清朝の書法の本流と考えていたものの性格を明らかにした。

楊守敬が伝えた潘存の書法は、用筆論を中心に検討すると、明治期に共有されていた「晋唐書道」観と大変親和性が高いものであることがわかった。それは清朝碑学の用筆論より王羲之書法を奉じる帖学の筆法論であった。本研究では、『八稜研斎随録』などの筆談資料の内容検討を中心に、これまでよく参照されてきた『鳴鶴先生叢話』や『鳴鶴先生学書談』のような著述の内容も、書法論の見直しの観点から再検討し、鳴鶴を中心とするか「六朝書道」の本質を書法の面から明らかにすることができた。

美術制度構築の過程で次第に書が公的な制度外に位置づけられていくことを確認するとともに、制度の外で鳴鶴らが主導する「六朝書道」が独自の発展を見せる過程をたどった。

博覧会開催関係の資料等を確認し、一部の唐様書家が制度的に認知されるところから、次第に書が公の制度からは外されていく過程を明らかにした。また、制度的な位置づけと距離を置くようにして、鳴鶴らが中心となって独自の「六朝書道」の構築を進め、巨大な門流が「制度」と拮抗する勢力を持つに至るさまをたどることができた。

明治後半期から大正期にかけて、鳴鶴らと、龍眠会の新旧勢力のせめぎ合いについて資料調査を通じて明らかにした。

明治後半から大正にかけてジャーナリズムが成長して書の雑誌文化も活況を呈する。鳴鶴とその門流が雑誌上で主張する書法論と、機関誌「龍眠」を基軸に斬新な新表現を主張した中村不折ら龍眠会のそれに対比的に扱い、書壇形成期のありようを明らかにした。あわせて性格の異なる「六朝書道」が入れ替わり現れる実態をたどり、それらがせめぎ合う実態は日本の書の独自性を示していることを確認した。

主に機関誌「龍眠」の内容から龍眠会の多様な活動の実態を明らかにした。

龍眠会の機関誌「龍眠」全冊を資料として扱い、多様な記事の性格を確認しながら中村不折、河東碧梧桐らの「六朝書道」の構想を明らかにした。また龍眠会内の路線上の不一致やコレクターとしての中村不折の姿勢を確かめ、龍眠会が屈折したかたちで今日の書に影響をおよぼしていることを記述した。

本研究を通して、従来の書的事例を列挙するだけの近代日本書道史の見直しの端緒を開くことができた。二年間の萌芽研究ということもあり、鳴鶴とその門流の活動の性格を美術界の動勢と対比しながら検討する、龍眠会や中村不折の活動実態の輪郭をえがく、といったことにテーマが限られていた面があるので、今後の研究においてより広範な視点を設け、大きいスケールで該当領域の再記述をめざしたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

中村史朗

「龍眠会研究初探 -彷徨する六朝書道をめぐって-」

「書学書道史研究」26号、書学書道史学会、2016.10(予定)、査読あり、pp.1-13(仮、掲載予定)。

中村史朗

「空海の書 -造物主の相貌-」

「墨」233号、2015.04.01、芸術新聞社、査読なし、pp.22-31。

中村史朗

「王羲之書法継承のしくみ -幻影をかたち-」

「墨」228号、2014.06.01、芸術新聞社、査読無し、pp.34-37。

〔学会発表〕(計 1 件)

中村史朗

「美術としての六朝書 -龍眠会の活動実態を中心に-」

第26回書学書道史学会大会、2015.10.03、東京・國學院大學常磐松ホール

6. 研究組織

(1)研究代表者

中村 史朗(Nakamura Shiro)

滋賀大学・教育学部・教授、

研究者番号：90378430